
たった一人で

裕哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった一人で

【Nコード】

N2350U

【作者名】

裕哉

【あらすじ】

人生に何かを求めている少年。なのに行動を起こしもしない。

彼を動かしたのは、酔った祖父の一言だった。

おぼつかない足取りでたどり着いたそれはきっと、諦めじゃなくて、妥協じゃなくて、もっと別の何かだった。

きっかけ

僕は今、休んでいる。微かに重たくなってきたまぶたをこすりながら、五回は読み終えたその漫画本を机に放り出す。最初のうちは楽しかった。毎日が日曜日で、学校の宿題も月曜日の恐怖におびえることもなかったからだ。

さらに言うともわりが学校に行っている間部屋で好きなことをしていられるというのはどこか悪戯をしているような快感があった。

だけどそれも数ヶ月のことで、今となってはもうなんだか本当に疲れてしまって、またベッドに潜り込んだ。

気がつけば日は暮れていて、時計の針が日付変更を静かに示す。それも毎日のことだった。

僕はただ休んでいるだけなんだ。回復すればまた、普通に暮らしていける。

そう言い始めたあの冬。ふとカーテンを開ければ窓の外ではどっぴりとした湿気をお供に生ぬるい雨が降っていた。

きつと朝がきて僕を待っているのは灰色に褪せた厚ぼったい空なんだろうな、と一人ごちた。毎日大きくなる胸の中にある穴、日々重くなる体。一日はこんなにも短いんだと改めて思った。

何をしたわけでもないのにこりきつた肩をぐるぐるとまわしながらタンズから夏物の服を取り出した。そろそろ衣替えの季節らしい。

そのついでに、ほんの半年前まで着ていた学生服を取り出してみる。三年間着続けたそれはあちこち痛み、それでも妙に手に馴染む質感だった。

楽しかったことなんて数えるほどしかなかったはずなのに、惰性のままに過ごしたあの中学校がなぜか懐かしいとすら感じてしまった。「知春、おじいさんが呼んでるよ」

母が僅かにドアを開けて僕を呼んだ。別に暴れるわけでもないのに、腫れ物を扱うような母の態度がどこかおかしかった。

相づちとも言えないほどの返事をする。母はまた音も立てずにドアを閉めて階段を下りていった。

僕と大して変わらない生活をしている祖父の呼びつけなんて無視してもよかったけれど、少し人との会話が恋しくなっていたことも手伝ってか、すぐに祖父の和室へ向かった。

「なあ知春。お前ももう十六だろう……そのくらいの時にしかできないことなんかいくらでもあるんぞ」

「また父さん達と同じこと？」

どこか線香臭いその部屋に僕は落ち着いていた。少し前、このままでもいいと思っているのかと怒鳴った父の前からはさつさと立ち去ったのを思い出した。

「違うわ、学校行けとかそんなんじゃないやねえ。場所なんかどこでもええわ、今しかできないことをやってみな」

かつて細い目を覆っていた白髪は禿げあがり、しゃがれた声で語る祖父はどうやら酔っているらしかった。

「何をさ」

「だから何でもええと言うとろうが。ああ……まず外へ出てみるのも良いかもしれんなあ。どうせ生きてりやワシみたいに引きこもりになるわい。今は忙しすぎるくらいでええわ」

母が酔った勢いで、祖父の昔について僕に話したことがある。彼の言葉になるほど、と頷けたのはそれも理由の一つだったと思う。

ただ、この夜更けにそんな話をされても僕の足は玄関へ向かわない返事に困っていると、呆れたことに祖父はもういびきをかきはじめていた。小さく零れたため息に眠気を感じて、僕もまた自分の部屋に戻ることにした。

祖父の部屋と違い、湿気のコもった嫌な臭いがした。

その一週間後、誰にも看取られず逝去した祖父の遺体が見つかった。

ふと思うことがある。いい高校へあがるために勉強していた同級生達。彼らはきつといい大学に入るためにまた勉強するんだろう。

大学へ入れば今度はいい会社に入るために努力する。そして老後のために毎日働いていくんだろう。

その先に何かがあるだろう、と足下の枯れ葉を蹴っ飛ばした。

今にも泣き出しそうな暗雲の下、重くなった髪の毛をかきあげた。数ヶ月散髪していないことを思い出す。もはや自分の姿見を気にする癖も消えていたらしい。

通りに人は少なくて歩いているのは主婦らしき女性や背広の男、それにつなぎに身を包んだ人達ばかりだった。

僕がそこに立ち止まっていたのは、これから行われるバイトの面接が億劫で仕方ないからである。駅から店まで歩いてくるだけで既に足が痛くなってしまうていた。

何より半年ろくに人と話さなかったからか、日本語を忘れていやしないかと不安に思うほどだった。

バイト先はなんでもないチェーン店の定食屋だった。特別大きくはないが清潔感のある店構えで働きやすい環境を！ というコピーが募集の見出しに載っていた。

これ以上佇んでいるのも恥ずかしくて渾身の力で扉を開けた。乾いたベルの音が店内にまで響き、短髪の男が顔を出した。

「バイトは初めてなんだって？」

一席に通され、つり目の男……三十代ほどの彼は店長だと言う、店長は意外に気さくな調子でそう言った。

「あ、はい……」

「始めようと思ったきっかけは？」

「中学卒業して……色々と落ち着いて余裕もできたので。社会勉強のためにです」

応えるのが精一杯だった。やたらと乾きを訴える喉からは自分でも分かるほど細く弱々しい声で曖昧な言葉が紡がれる。

ふうん、と一呼吸。

きっかけ……敢えて言うなら、祖父の死だった。同じ家に住んでいたとは言え数ヶ月に数回しか話さなかったくらいの仲だ。涙の一つ

も出てこなかった。

だけど、最期に彼が遺した言葉が気にかかって、本当に久しぶりに説教のような言葉を受け入れた。

まずその第一歩として、バイトを選んだのだ。

「平日昼間も入れるんだって？ 学校は？」

「行っていないので……いつでも、はい。入れます」

その後もバイト内容の説明が十分ほど続いた。僕はああだとかはいとか、吐息のような相づちしか打てなかった。その間にも店長の眉は少しずつつり上がり、説明も荒くなっていたような気がする。

「それじゃあ最後に、あなたの自慢できる点を」

僕はまた、何も答えられなかった。

道のり

ふと、けたたましく鳴く蝉の声に気付いた。カレンダーは既に8月を差していて焦がするような太陽の輝きがまぶしかった。

「お疲れさまー」

残飯を捨てていると泉さんが声をかけてきた。自然と頬が緩むのが自分でもわかった。お疲れ様です、と返すとまたそんな固い言い方する、と泉さんも笑った。

「今日も忙しかったねー」

「ですね。最後に十名様きた時はどうしようかと」

あったあった、とその分の料理の半分以上を用意してしまった泉さんがため息をつきつつ頷く。揺れる前髪からのぞく大人びた瞳にくん、と胸が跳ねる。

「さすがに慣れたみたいね」

「そりやまあ……言ってもまだ半年やってませんけどね」

「勉強とかどうなのさ、少年」

高校へ通ってはいないけど、通信で勉強を始めて大学へ進むつもりだと告げると、泉さんは目まで細めて破顔して頷いた。

「忙しいですけど……なんていうか、悪くないです」

「それでいい、それでいい。がんばれ！」

「はい！」

最近、泉さんとよく話す。バイトではそれが楽しみになっていた。今日も忙しかったなあ、と首をまわしながら思った。それでも、もう無理というほど疲れていないのが少しだけ嬉しかった。

「最近頑張ってるな」

休憩室でも店長にそう言われた。少しくすぐったくて、ありがとうございます、とだけ答えた。

「やっぱとも君くらいの年の子はいいいなあ……たった数ヶ月で成長しちまう」

「成長しましたか？」

まだまだ自分の内に直すことがあることを自覚しているから、おかしいと同時にやっぱり嬉しかった。

「洗い物溜まらなくなっただろう」

バイトを始めてから数ヶ月。店長に褒められることなんてそうそうなかった。

「あ……はい！」

「声も出てきたな。給料も出てるぞ」

カレンダーの給料日を差した店長は形の悪い笑みを浮かべ、さつさと上がれと手を振った。

手には二枚の紙切れがあつた。バイトを始めてからの初給料、その後も数回口座に振り込まれたそれをほとんど全て使い切つて温泉旅行のツアー券を買つたのだ。

別に何を思つたわけでもない。誰かの誕生日でもないし母の日でも父の日でもない。

だけど……バイトを終えた時の手の匂いが、小さなころ僕の頭を撫でてくれた母のそれと同じことに気付いた。

ただ僕は部屋を出ただけだ。バイトを始めただけだ。それだけで泣いて喜んでくれた母。

わざわざお金のかかる予備校や大学へ行かせてくれるという父。頑張れと誇らしげに肩を叩いてくれた。

あの二人に、短い休日を送ろうと思つた。その間の家事くらい、僕がやつてやるさ。料理だつて作れるようになったし洗濯物だつてできる。

これを渡した時の母の顔を思うと、今から笑いがこみ上げてくる。

陽炎の踊るアスファルトの先……そこに、彼女はいた。

長く艶やかな黒髪は日に照らされて輝いていて、桜色の唇も大きめの黒い瞳もそのままだった。彼女は僕の目の前を通り過ぎて歩き去ろうとする。

僕は自然とその背を追っていた。何かが。何かがあるかもしれないと微かな期待に胸が脈打ちだす。ふわふわと足下がおぼつかなくて妙に息苦しかった。

妙に歩みの遅い彼女。その背は中々消えなかった。

もしかしたら、彼女も僕に気付いて、声をかけられるのを待っている……。

馬鹿な考えだった。すぐに僕自身の足が重いだけなんだと気付いた。彼女はきつとそう、僕のことなんてすでに記憶の彼方に置いてきてしまっただろう。

汗ばんだ手を握りしめる。足が震える。舌が乾いた口を何度か開いて、ついに彼女を呼び止めようとした。

すると彼女はその場で立ち止まり、胸に手を添えて笑顔を浮かべた。その笑顔も本当に変わりなかった。その隣に背の高い格好良い少年がいたこと以外は。

数瞬世界が止まって、僕は間抜けに伸ばした手を引っ込めた。心臓はとくん、とくんと冷たい血液を体中へ送っていく。かすかに俯いて僕は踵を返した。

何かしたわけじゃないんだ。好きだ好きだと思いつつも、何もなかったんだ。

受け身になっていたから、何もなかった。だからこれはしょうがないんだ。

だというのに、僕はどこか諦めきれなかったのだろう。昔は良かったとばかり愚痴で、ずっと時間を止めていたんだ。

だけど世界の時間は止まっていけないから。僕はまだまだ、立ち止まった分を取り返せてないから。

ペースを速める。僕の目の前には遠く広がる町並みがある。その向こうには僕の家だ。今日も忙しかった。明日もきつとそんな毎日が続いていくんだ。

悪くない、と思った。

胸は軽くならなかったけれど、ずっと埋らなかった胸の穴に何かが

満たされたのが分かった。

まず母さん達にプレゼントしてやろう。もう値段だつて教えてやろう。こんだけ稼いだんだって。まだ遊ぶ金もあるんだぞって見栄張ってやろう。

それで、この鬱陶しい髪切って……祖父さんの墓参りにでも行こう。やることはたくさんあるけど。明日もまた意味のない日が続いているから。そこでは待つているだけじゃ何も始まらなくて、でもほんの少しのきっかけでいくらでも変わっていく未来があるんだ。

今度は店長に新しい仕事教えてもらって、泉さんとまた話そう。それだけで十分明日は楽しいさ。

だからちよつと前の僕。お前頑張ったよ。誰も助けられなくて、誰も好きになつてくれなくても、たった一人でも。部屋から出て、一歩踏み出したから。

そしたらほら、いくらでも手伝ってくれる人はいただろう。いくらでも出会いがあつただろう。

お前が悲観したこの世界も、悪くないって思ったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2350u/>

たった一人で

2011年10月5日13時32分発行